

The Conversation on Renaissance Art and Herbs

# ルネサンス美術と ハーブをめぐる会話

弘前大学人文学部 足達 薫

## 学生研究室にて

教官「今いいかな？」

学生「いいですけど。先生にしては謙虚だな、気味が悪い。なにをたくらんでるんですか」

教官「僕の研究テーマがルネサンス美術史だということは知っているよな」

学生「え？そうだったんですか、初めて知りました……というのは冗談です。要するに、主に15-16世紀の西洋美術史を研究してきたということですね。それで？」

教官「実は今度、ルネサンス美術に描かれたハーブというテーマでエッセイを書かせてもらうことになった。しかし、君も知っての通り、僕はアロマ文化とも自然療法とも縁遠い人間だ。癒しという言葉がこれほど似合わない人間も少ないと思う」

学生「いばらないでください。要するに、私からヒントをもらいたい、と」

教官「この前、君が煎れてくれたハーブティーは美味しかったからな」

学生「(無視して) ルネサンス美術には香りの良さそうな植物が沢山描かれているじゃないですか。た

例えば、日本でも人気のあるイタリアの画家、ラファエッロ・サンツィオ(1483-1520)も草花を沢山描いています」

教官「たしかに、ルネサンス美術には、草花が描かれた作例が多い。とても多い。おそらく彼らは、日常的にそうした草花の香りに憧れ、味わっていたんだろうな。これを同時代の料理法と比べてみるのも面白いかもね」

学生「え？どういうことですか」

教官「たとえば、16世紀の歴代教皇の〈料理番〉をつとめあげた偉大なイタリア人シェフ、バルトロメオ・スカッピが著した『料理法』(1570年)なんて本を見ると、香りに相当こだわっていたことがわかる。彼のレシピのひとつに、〈強甘緑ソース(Salsa verde dolce e forte)〉というのがあったそう。酢と蜂蜜をベースにして、パセリ、ハッカ、タラゴン、サルヴィアといった香草を混ぜて作る。もちろん、この種のソースはパンを食べるために中世以来使われてきたんだが、ルネサンス人であるスカッピは、とりわけ香りを強調して評判を勝ち得たという。ルネサンスの人たちが植物の香りを大切に思っていたことがよくわかる逸話だね<sup>(1)</sup>」

学生「美術とは関係ないけど、たしかに美味しそうだなあ」

教官「というわけで、ここからどうやって話を進めたものだろうか」

## 《美しき女庭師》

学生「先生、ともかく、ルネサンス美術に話を限定しましょう。まず、基本的な質問なのですが、草花



PROFILE

Kaoru ADACHI

弘前大学人文学部講師

専門は15-16世紀イタリア美術史

連絡先：E-mail:kaorucci@cc.hirosaki-u.ac.jp  
http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/cp-kouza/adachi.htm



図1 ラファエッロ・サンツィオ  
《美しき女庭師》  
パリ、ルーヴル美術館

が描写される美術には、どんなものがありますか？」

**教官**「すぐに思い浮かぶのは、聖母子テーマだね。つまり、キリストと、その母である聖母マリアを描き出した絵画や彫刻のことだよ。たとえば、君が先ほど名前を挙げていたイタリアの画家ラファエッロの作品のひとつに、《美しき女庭師》(1507年、パリ、ルーヴル美術館)と呼ばれる油彩画がある(図1)」

**学生**「舞台は野原ですね。中央の女性がマリアか。2人の子供がいますが、キリストはどちらでしょう？」

**教官**「マリアと手をとって見つめ合っている左側の子供さ。右側で十字架を持って跪いているのは洗礼者ヨハネ。ヨハネは後にキリストに洗礼を授けるわけだけれど、ルネサンス美術では、しばしば子供の姿で聖母子とともに描かれる」

**学生**「ところで、《美しき女庭師》という題名の由来は？」

**教官**「この題名は、後の時代のフランスの収集家が、伝統的なキリスト教図像学に基づいて付けたものだ。マリアは野原で子供たちと戯れている。様々な草花が描かれた野原は、まるで庭のように見える。実際、初期キリスト教以来、聖母マリアは〈閉ざされた庭〉という隠喩によって語られてきた。処女にしてキリストを産んだマリアの清らかさを、純粋かつ不可侵

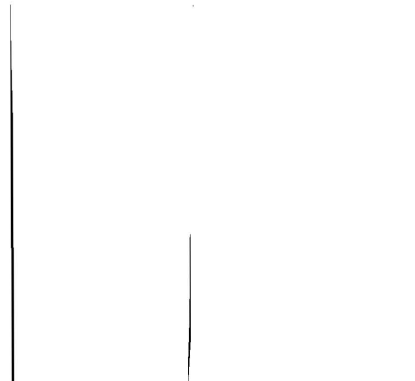


図2 ラファエッロ工房《ロτζジャ・デイ・ブシュケー (ブシュケーの開廊)》  
ローマ、ヴィッラ・ファルネジーナ

の庭に見立てたというわけだな」

**学生**「なるほど。要するに、このラファエッロ作品のマリア自身が庭であり、また、生い茂る草花を統べる庭師のようなものだという事ですね。だったら、マリアとハーブが結びつく場合もありそうですが」

**教官**「あ、そうだった。忘れていた。実は、〈聖母マリアのハーブ〉と呼ばれてきた植物があるんだよ。そしてなにを隠そう、それを描いたのもラファエッロなんだ」

### 聖母マリアのハーブ

**学生**「隠さなくていいんですよ。回りくどいなあ」

**教官**「ごめんごめん。1517年頃、ラファエッロは自分の工房を総動員して、ローマのパラッツォ・キージという邸宅の内装を行う。この邸宅は、1580年から、名門ファルネーゼ家の所有物となったため、現在はヴィッラ・ファルネジーナと呼ばれている。彼らは、この建物の1階にある開廊の天井や角柱列に、連作壁画を描いた(図2)。そこに、〈聖母マリアのハーブ〉が含まれている」

**学生**「この装飾のテーマは？」

**教官**「古代の著述家アプレイウスが記述した〈アモ

図3 図2の部分  
(ウェヌスとプシュケー)

ルとプシュケーの物語》だね<sup>(2)</sup>。プシュケーというのは、絶世の美女として知られていた某国の王姫だ。彼女は、愛の神アモルと愛をはぐくむようになるが、アモルは自分の姿を透明にして、神であることを隠すんだ。しかしプシュケーは好奇心に負けて、眠っていた無防備のアモルの姿を見てしまい、怒ったアモルは去っていく。後悔したプシュケーは、恋人を捜して世界をさまよっているうち、アモルの母親である美の女神ヴィーナスに捕らえられる。この母親は息子の敵とばかりにプシュケーに様々な試練を与えるんだが、最後にはアモルが母を諫めて和解する。そして、プシュケーとアモルは、ついに天の神々の前で結婚式を挙げることになる」

学生「要するに、鶴の恩返しと嫁姑問題とが混じってるわけですね」

教官「(無視して) さて、ラファエッロ工房による壁画装飾は幾つかの場面に分割されている。プシュケーやアモル、ヴィーナスをはじめ、多くの人物像が裸体で描かれているんだが、それらの場面は、果実、穀物、花、豆、キノコといった様々な植物で作られた柱や梁によって分割されている」

学生「そのようですね。ここには何種類の植物が描かれてるんでしょう?」

教官「イタリアの美術史家、ジュリア・カネーヴァが、ここに描かれた植物のほとんどを同定している<sup>(3)</sup>。それによれば 165 の植物の正体が明らかとなった。まったくよく数え上げたもんだよ」

学生「先生にはとても無理ですね、根気がないから。

図4 図3の部分 (「ローマのカモミール」)

ところで、この部分(図3)は誰がなにをしている場面なのですか?」

教官「プシュケーは、ヴィーナスから、恐るべき急流のコキュトス河の水を汲んで持ってくるように命令される。ヴィーナスはそこでプシュケーが河に流されてしまえばいいと思ったんだね。ところが、彼女はそれに成功するんだな。生還したプシュケーを見てヴィーナスが驚いているのがこの場面だよ」

学生「プシュケーもなかなかやりますね」

教官「ヴィーナスの左手のところに、白い花の植物が描かれているだろう? (図4)。これこそが、古来イタリアにおいて、〈ローマのカモミール (camomilla romana)〉と呼ばれた植物であり、さきほど述べた〈聖母マリアのハーブ〉なんだ。要するに、ローマを中心として広く南イタリアに広がっていたカモミール。使用法は今と変わらないようだ。煎じてお茶にして飲むことによって健康維持と精神安定に役立てられていた。もともと、古代ギリシャで〈カマイメロン〉と呼ばれていたものだそうだ」

学生「どういう意味ですか」

教官「〈地上の林檎〉という意味だね。ギリシャ人からこの植物への愛を受け継いだローマ人たちは、これにさらに象徴的な意味を与える。古代ローマ人

の言語である古代ラテン語では、甘い香りのことを〈ベネオレンティア (beneolentia)〉と呼んだんだが、これとそっくりな単語で、〈ベネヴォレンティア (benevolentia)〉というのがある。こちらは、慈愛という意味だ。古代ローマ人たちはこの言葉遊びに基づいて、このハーブを豊かな愛情の象徴と見なしたそうだ」

学生「それがなぜ、〈聖母マリアのハーブ〉と呼ばれるようになったのでしょうか？」

教官「もちろん厳密な実証は不可能だけれど、ちょっと想像力を働かせれば納得できると思うよ。古代ローマ人たちがカモミールに与えた象徴的意味を、初期キリスト教徒もまた踏襲したと考えていい。つまり、このハーブの癒しの香りは、聖母マリアが息子キリストへと注ぐ愛情、そしてさらにキリスト教者すべての母としての愛情の象徴と見なされたと考えられるんだ」

### 癒し、魔よけ、そして生命力の象徴

学生「なるほど。ところで、プシュケーの物語の基本的テーマも、考えてみれば、癒しですよ。愛を失い傷ついた彼女が、試練を乗り越えて再び愛を手に入れるわけです。だとすれば、ラファエッロたちが描いたこの装飾で、そういった物語場面が、植物

で出来た柱や梁で囲まれていなければならない理由がわかる気がします。〈聖母マリアのハーブ〉だけでなく、ここに描かれている植物すべてが、いわばプシュケーを応援し、癒そうとしている……そんな風には考えられませんか？」

教官「同感だよ。プシュケーというのは、もともとギリシャ語で〈魂〉という意味であり、彼女の物語は魂の遍歴という深層の意味も有している。植物たちは、その香りによって、傷ついた魂を癒し、励ますというわけだな。さらに、ラファエッロたちは、プシュケーを積極的に守ろうともしている。なにを隠そう、やはりハーブを使ってね」

学生「勿体ぶらないで早く教えてください」

教官「わかったわかった。やはりこの装飾の一部なんだけど、ここを見てくれよ (図5)。これは、先ほどの場面の直前、つまりプシュケーが急流の水を汲み終えて、アモルの弟分であるプット (男性幼児) たちによって運ばれている場面なんだ。この右隅の箇所、白い小さな花を咲かせているのが、〈アルメル (harmel)〉と呼ばれるハーブだ (図6)」

学生「どんな香りがするんでしょう？」

教官「古今東西の草花の象徴について研究したカタビアーニという人によると<sup>(4)</sup>、どうやらニンニクの臭いに似たかなり強い香りがするようだね。ところで、キリスト教以前のギリシャでは、この植物は魔除けの効果を持つと考えられていたらしい。たとえば、ホメーロスの『オデュッセイア』やオウィディ

図5 図2の部分  
(プットたちによって運ばれるプシュケー)

図6 図5の部分 (アルメル)

図7 図2の部分 (ココツァとザクロ)

ウスの『変身物語』のような古代の詩には、キルケーという、人間を獣や怪物に変身させてしまう魔女が登場する。しかし、英雄オデュセウスは、〈モリュ(moly)〉と呼ばれる謎の植物の球根を携えて、この魔女を屈服させたという。この植物と同一視されたもののひとつが、〈アルメル〉なんだ」

学生「なるほど、魔除けのハーブか。吸血鬼はニンニクが苦手だという話がありましたけど、もしかしたら、それも〈アルメル〉による魔女退治の逸話に由来するのかもしれませんがね。そういう意味では、ラファエッロ工房の装飾は、癒しと魔除けの植物園という感じかな？」

教官「うまいこというね。この連作壁画では、一見したところでは、植物はせいぜい気の利いた飾りにはしか見えないかもしれない。けれど、画家たちは、そしてまた鑑賞者たちは、それら植物の効能、香り、そして象徴的意味をととても重要に考えていたようだね。このことに関連して、興味深い描写がある(図7)。これは、イタリア語では〈ココツァ(cocozza)〉と呼ばれている。カボチャの一種だね」

学生「変な形だなあ。ちょっと不自然ではないですか」

教官「うん。これは明らかに男根の形を模しているんだ。しかもここでは、熟して割れたザクロとともにある。つまり、植物の形態によって性行為が暗示

されているんだね。この描写については、研究者たちの評価も定まっていない。艶笑的な遊びと見なす人もいる。君はどう思う？」

学生「ラファエッロたちは、植物の形態を借りて、生命力それ自体をまことにおおらかに、そして愉快地に賛美しているのだと思います。単なる栄養供給源として植物を捉えるのではなく、人間と同じくそれ自体生きているものだと理解すること。その香りを含めて、生命力それ自体に驚嘆してみせること。画家がここで暗示するこうした態度は、植物との日常的な関係が希薄になりがちな現代の都市生活者にはとても新鮮です」

教官「いいこというね。うん。そうだね、こんな感じでエッセイをまとめてみようかな。ありがとう、なかなか有意義な会話だった」

学生「そうですか。がんばってください。それではまた。私は勉強に戻ります」

教官「あれ？今日はハーブティー、入れてくれないの？」

学生「(無言のまま、追い払うように手を振る)」

#### 参考文献

- (1) F. Sabban, S. Serventi, *A tavola nel Rinascimento con 90 ricette della cucina italiana* (Roma-Bari: Laterza, 1996), p.159. (F.サバン、S.セルヴェンティ【ルネサンスの食卓によくこそ】)
- (2) アブレウス『黄金のろば』(上巻) 呉茂一訳 (岩波文庫、1956年)、125-182頁。
- (3) Giulia Caneva, *Il mondo di Cerere nella Loggia di Psiche* (Roma: Fratelli Palombi Editori, 1992). (G.カネーヴァ【プシュケーの開廊における豊穡の女神ケレスの世界】)
- (4) Alfredo Cattabiani, *Florario. Miti, leggende e simboli di fiori e piante* (Milano: Mondadori, 1996). (A.カッタビアーニ【フロラリオ: 花と草木の神話、伝説、象徴】)